

# 源信僧都の作と傳へられる和讃の眞偽 (下)

多 屋 頼 俊

【目次】 一、序 二、二十五菩薩和讃 三、極樂六時讃 四、天台大師和讃 五、十樂和讃 六、來迎

和讃 七、山王和讃 八、傳教大師和讃 九、其他 十、結語

## 四、天臺大師和讃

高野辰之博士は「日本歌謠史」の中に、此の和讃を別に證明を用ゐずして「源信の手に成つた」と云つて居られる。而して此の和讃の典據について「傳教大師將來目錄の中にも、天臺智者大師讃一紙三卷とあるが、源信の作はこれに基いたものでなく、智證大師の將來した天臺大師畫讃碑本、又は其の撰述になる天臺大師註畫讃によつたもので、恐らくは註畫讃に基いたものであらう」と云つて居られる又天臺霞標を見ると、その四編卷之三に此の和讃を僧都の作として載せその終りに「慧心僧都、依顏眞卿作大師畫讃、而作大師和讃云」と云つてゐる。此和讃が僧都の作か否かは後廻はしにして、先づ典據について、高野博士及び天臺霞標の説に依つて、和讃を畫讃及び註畫讃と比較して見ると、意外にも符合せぬ點が少くない。此和讃は云ふ迄もなく智者大師の傳記を中心に、其の徳を讃嘆したものであるが、(その點では畫讃と同じであるが)和讃の記載事項が畫讃に

も註畫讚にもなくて、他の書に見わるものもあつて見れば、和讚は其等の書をも材料に用ゐて居ると云はねば成らない。一二の例を擧げて見よう。

和讚には智者大師の幼時を次の如く叙してある。

嬰兒乃間乃瑞相毛

人與利異仁御座豆

臥豆波必受合掌志

居豆波定豆西仁向久

生年七歲奈利志時

好豆寺仁詣豆禮波

諸僧口仁授計志仁

普門品乎會以豆世志

一度聞古止得豆志加波

永久不忘成仁計利

殘利波教人無久豆

獨利暗仁會悟利仁岐

と而して畫讚には此語に當る可き部分が全くない。従つて畫讚註にもない。然るに續高僧傳の第十七「隋國師智者天臺山國清寺釋智顛傳」を見ると「(上略)兼以臥便合掌、坐必面西、年一紀來口不妄噉、見像便禮、逢僧必敬、七歲喜往伽藍、諸僧訝其情意、口授普門品、初契一遍即得、二親遏絕不許更誦、而情懷惆悵、庵忽自然通餘文句(下略)」とある。又智者大師別傳卷上には「至年七歲、喜往伽藍、諸僧口授普門品、初啓一徧即得、而父母遏絕、不聽數往、每存理所誦而惆悵未聞、庵然自然、通餘文句、後以經驗無所失矣」とある。即ち和讚は此等の書に依つた事明である。又大師が

天臺山に入られる所を叙して和讃には

宣帝留免給閉止毛

天臺山仁入給不

其山嶮久高久志豆

八重一重賀如奈利

東波蒼海遙仁豆

蓬萊方丈遠加良受

西仁波長山連豆

人無岐境仁入給不

石橋度豆虹乃如久

瀧水落豆布乎引久

鳳鳥鸞鳥飛翔利

銀地金地仁分禮太利

白道獻賀古岐室

王子晉賀本乃跡

一一回利豆見給不仁

昔乃夢仁異奈良受(以下略)

とある。然して畫讚では

遂入天臺華頂中

因見定光符昔夢

の二句で叙せられてゐる。畫讚註には「昔夢」の説明はあるが、天臺山の説明はない。然してこの天臺山の叙述の初五句は、一統志(四十七卷)に「天臺山在三縣西一百一十里。超然秀出。有三八重。視之如三一帆。高一萬八千丈。周廻八百里。山有三八重。四面如レ一」とあるのに依つたもの。次の「東は云々」等の句は、孫興公の遊天臺山賦に「天臺山者、蓋山嶽之神秀者也。涉レ海則有三方丈蓬萊。」

登陸則有「四明天臺」(文選、賦已)等の語に依つたものと思ふ。「石橋云々」の句は、別傳に「訪高察之山路、瀨僧順之雲潭、度石梁屢降南門」とあり、台州府志(六)には「天臺山踰三十里、至石橋兩崖門立。石橋橫亘。廣不盈尺。而山北左右肩有雙泉飛流、至橋始伏。伏出仍瀉爲瀑、可百餘尺、自下視之、石橋在半天。云々」とある。遊天臺山賦には「邈彼絕域、幽邃窈窕、近智以守見而不之。之者以路絕而莫曉、晒夏虫之疑冰、整輕翮而思矯、理無隱而不彰、啓三奇以示兆、赤城霞起而建標、瀑布飛流以界道、……既克躋於九折、路威夷而脩通、恣心目之參朗、任緩步之從容、藉萋々之纖草、蔭落落之長松、覲翔鸞之裔々、聽鳴鳳之嚙々云々」とある。これらに依つたものと思はれる。白道猷の事は、梁高僧傳卷十一、天臺羅漢記等にも出てゐるが智者大師別傳に「聞天臺山地記稱有仙宮、白道猷所見信矣」とある。「王子晋が本の跡」は智者大師別傳に「(智者大師が)嘗宿石橋、見有三人、皂幘經衣、有二老僧、引之而進曰、禪師(大師)若欲造寺、山下有皇太子寺基、捨以仰給」とある。皇太子は晋王廣の皇太子晋である。この事は畫讚にも「又有聖賢垂秘旨、時平國清即名寺」とある。「昔の夢」は畫讚註に出てゐるからこゝには記さない。

和讃の文々句々の出典については覺胤の「天臺智者大師和讃荻原鈔」がある。部分的には不十分な點もある様に思ふけれども、今は出典を論ずるのが主眼ではないから此位に止めよう。さて以上

記した所から見て、此和讃が、「恐らくは註畫讃に基いたものであらう」と云ふ高野博士の説及び「依顏眞郷作大師畫讃、而作大師和讃云」と云ふ天臺霞標の説は稍不當の様に思ふ。自分は和讃は單に畫讃とか畫讃註とか云ふ一二のものに依つたのではなく、廣く智者大師の傳を涉獵した結果に成つたものと思ふ。

此の和讃は佐々木博士等が指摘して居られる如く此の中の一部が切り取られて梁塵祕抄卷二の中に三首まで入つて居る。又橋川教授が指摘して居られる如く「端潮亘りて三百里、虹梁合して六十所、一時に法流と成てこそ、流水品をば講せしに」の四句が少しく異同はあるが、無住の「雜談集」卷六に引用せられて居るのを見れば、此の和讃の流布も推知出來、又その製作年代にも大體の見當を付け得るわけである。さて此の作者は誰であらう。

此の和讃の作者は古くから源信僧都と傳へられてゐる。僧都は既に「智者大師畫讃註。」を作つてゐる。而してこの畫讃註は、初めに「今加ニ數字、令ニ未レ諳者、委知ニ大師德」とあるのに依つて其の作意を知る事が出來る僧都は天臺大師の傳を頗る廣く涉獵して畫讃の註を作つてゐる。この僧都が更に一步を進めて、漢文の畫讃註に用ゐた材料を以つて、和文の讃をも作つたであらう事は、自然の道筋である。其處で（一）和讃の製作目的、特に讚畫註との關係。（二）和讃の材料。（三）製作年代の三點から推して、余輩も亦此和讃が僧都の作であると云ふ傳に賛成するものである。

## 五、十樂和讚

惠心僧都全集（再版）第一卷に入つて居る。七五調四百十六句。和讚としては大作の方である。扱て全集本は

卷末曰

右十樂和讚傳教大師和讚惠心僧都御作として法道和尚の手記中にあり茲に淨寫して稱名庵經藏におさむ

大正十五年十一月廿四日 引接寺現住稱念院阿法暢和南

とあり、元本は「伊勢引稱寺稱名庵經藏所藏一卷與六時和讚傳教大師和讚合本」とあるものであると記されてある。其處で「法道和尚の手記」なるものが、どの程度に信用出来るものかは自分は知らないから、直に本文を檢剖して見よう。

先づ此の和讚は十章に分れ、第一聖衆來迎樂、第二蓮華初開樂、第三身相神通樂、第四五妙境界樂、第五快樂無退樂、第六引接結緣樂、第七聖衆俱會樂、第八見佛聞法樂、第九隨身供佛樂、第十増進佛道樂となつて居る。然るに往生要集卷上之本、大文第二に「欣求淨土者。極樂依正功德無量百劫千劫說不能盡。算分喻分。亦非所知。然群疑論明三十種益。安國抄標二十四樂。既知。稱揚只在人心。今學十樂。而讚淨土。猶如一毛之滯大海。一聖衆來迎樂……十増進佛道樂也」とあつて

十樂和讚の章目は全く往生要集に依つて居る事が知られる次に往生要集には、第一乃至第十の樂について一々説明してある。この説明と十樂和讚とを對照して見よう。

(十樂和讚)

(一) 第一、聖衆來迎樂

音樂空にきこゆれば

心に恩愛うちわすれ

必ず歡喜の心生ず

(二) 觀音蓮台さゝげつゝ

(三) 勢至は聖衆と讚嘆す

(四) 草庵に目合すれば、

(五) 華臺にあなうら結ぶなり

(六) 佛の後へにいたがいて

(七) 菩薩聖衆の中に入り

(八) たゞ一念の間にぞ

(九) 極樂世界に生ずなる

(往生要集)

(一) 第一、聖衆來迎樂者。凡惡業人命盡時。

風火先去。故動熱多苦。善行人命盡

時。地水先去。故緩緩無苦。何況念

佛功積。運心年深之者。臨命終時。大

喜自生。所以然者。彌陀如來以本願故。

與諸菩薩。百千比丘衆。放大光明。皎然在

目前。(二)時大悲觀世音。申百福莊嚴手。敬

手寶蓮臺。至行者前。(三)大勢至菩薩。與無

量聖衆。同時讚嘆。授手引接。是時行者。目

自見之。心中歡喜。身心安樂。如入禪定。當知。

(四)草庵瞑目之間。(五)便是蓮臺結跏之程。(六)即從彌

陀佛後。(七)在菩薩衆中。(八)一念之頃。(九)得生西方極

(一〇)六欲四禪の樂みも

(一一)いまだ輪廻を免れず

(一二)永く苦海をこえずぐれ

(一三)其よろこびは述難し

信心眞にうるひとは

攝取の光明見ざれども

大悲物憂き事なくて

常に此身を照すなり

(第二蓮華初開樂以下略)

樂世界。二〇彼忉利天上億千歲樂大梵王宮深

禪定樂。此等諸樂。二二未足爲樂。輪轉無際。不

免三途。而今處觀音掌託寶蓮胎。三三永越過苦海。

初往生淨土。三三爾時歡喜心。不可以言宣。

龍樹偈云。若人命終時。得生彼國者。

卽具無量德。是故我歸命。

(第二蓮華初開樂以下略)

扱右について見るに、和讃の語で、往生要集の第一樂の文中に求め得ないものは、初の二三四の三句及び終りの四句である。初の三句は聖衆來迎を目撃する前に、第づ天の音樂を聞くこと云ふのであるから、聖衆來迎樂の和讃として敢て不穩當ではない。源信僧都の作と云ふ來迎和讃(これに就ては後に記す)の一種に「臨命終の時至り、正念不違で向西……聞ば西方界の空、伎樂歌詠風ほのかなり云々」とあるものがある。又前記往生要集の臨命終時、大喜目生云々の文とも關係の無いものでもない。然し終りの四句は前の文と緊密な關係にあるものではない。且、往生要集の第一樂の文中からは出據を見



出す事が出来ない。處が四句の中終りの三句は、親鸞聖人作の源信大師和讃の第八首目と殆んど同じである。即ち親鸞聖人の和讃は

(煩惱ニマナコサヘラレテ)

攝取ノ光明ミサレトモ

大悲モノウキコトナクテ

ツネニワカ身ヲテラスナリ

とある。異なるのは第四句「ワガ身」が十樂和讃では「此身」となつて居るのみである。而して親鸞聖人の和讃の原據は、同じく往生要集ではあるが、上卷之末、正修念佛章の觀察門釋「我亦在彼攝取之中。煩惱障眼雖不能見。大悲無倦常照我」の文である。原據は第二として、此の如く類似の語句がある以上は、何方かゞ他を模倣したと考へたい。翻つて前掲の和讃について考へるに、全部廿句の中十七句までは、往生要集の第一樂の文を其儘和譯したものに過ぎない。然も其譯し方は縮譯でも意譯でもなく、都合のよさうな語句だけを拾つて延べ書にしたかの觀がある。又最後の四句は、平生業成の意に解し度い言葉であつて、聖衆來迎の和讃としては、不適當の様に思はれる。又全體から見ても、往生要集では意味、頗る明瞭であるのに、和讃の方は餘程推測を逞ましくしないど意味が分らない。又往生要集に於いては、聖衆來迎樂は「爾時歡喜心。不可以言宣」で終つて龍樹偈云以下は來迎信仰について一つの證明として出したものであるのに、和讃に於いては何故に遙に後章の煩惱障眼雖不能見云々の語句を此處に譯出したのであらうか。以上の事を綜合して

考へると、十樂和讃の作者は、往生要集の作者とは決して同一人ではなく恐らくは親鸞聖人の和讃の後に出来たものと推定して差支ないであらう。因に七八の二句は、榮華物語玉の臺の卷に「草庵に目をふさぐ間は、即ち蓮臺にあならうを結ぶ程なりけり」とあるから、一應は十樂和讃が榮華物語に影響したのではないかとも考へられるが、然し此語は往生要集の「草庵、瞑目之間。便是蓮臺、結跏之程」の語に依つたと見る方が穩當であらう。

以上は第一聖衆來迎樂のみに就いて記したのであるが、第二樂以下に就いても、右の推定を助けはしても、少しも牴觸する所はない。殊に第二蓮華初開樂の終りに、

大慈大悲の彌陀世尊 御顔ばせもうるはしく

微妙の聲を顯はして 行者につけて宣はく

汝しらずや十劫の 正覺なりし昔より

今日や昨日と待兼て 恨むと告げし事もあり

直ちに百福莊嚴の 御手をのべて頂きて(をカ)

撫つ擦りつ手をとりて 喜び給ふそのときは

心にあまる嬉しさに 何と答へんかたもなく(以下略)

と云ふ句がある。和讃が如何に通俗を旨とするとは云へ、此の如き卑俗な言を源信僧都が用ひられ

たとは考へられない。往生要集には此句にあたる語は勿論ない。思ふに十樂和讃は源信よりも遙に後世の詩的素養の缺けた何人かゞ僧都に假託して作つたものであらう。或は作者には僧都に假託する意志はなかつたのが、後世の人に依つて都僧に附會されたのかも知れない。

## 六、來迎和讃

高野博士の日本歌謠史にはこの和讃を證明を用ゐずに僧都の作として、「源信は又丹青の枝にも拔群の靈腕を有して、彼の崇高壯美嚴肅端麗あらゆる讃辭に値する二十五菩薩來迎圖の如き絶代の至寶を遺すと共に、之を文字言語にした一和讃を作り出した。それがすなはち來迎和讃である」と云つて居られる。源信筆と傳へる來迎圖は少なからずあり、又僧都が來迎圖を書いた云ふ事の信賴すべき記録もある様である。然し僧都眞筆と云ふ確證のある來迎圖は一つも現存して居ない筈である。従つて博士の様に簡單に片付ける事は出来ないであらう。又坂井衡平氏はその著日本歌謠史講話の中に此和讃を僧都の作として「流石に文學の黄金時代の作丈に修辭に美しい手法がある。榮華物語にもこれを引いた處がある(玉の臺)」と云つて居られるが、予輩が檢索した際には榮華物語中に此和讃を引用したと思はれる所は見出し得なかつた。尤も此の和讃は長西の淨土依憑經論章疏目錄にも源信作として出て居り、又天臺霞標四編卷之三にも源信作として出て居るから、源信作と云ふ事に相當信用を置いてもいゝ譯ではあるが、然し長西は元暦元年の生れで、法然上人の弟子になつ

たのは建仁二年十九才の時であるから、かの目錄を編したのは何才の時か自分は知らないが、源信の没後少くとも百八十五年、恐らくは二百餘年後であらうと思ふ。(源信没後二百年目)彼が如何なる材料を用ひて目錄を編纂したかは明かでないが、兎も角約二百年の間隔があるのであるから、その結果を直ちに信用するのは稍不安心である。又天臺霞標は定評のある立派な書ではあるが、前に記した二十五菩薩和讃が、この和讃の次に源信僧都の作として出してある位であるから、これ又直ちに信用する事が出来ない。

この和讃、天台霞標所載のものど浄業和讃所載のものどは語句の上に大分出入がある。天台霞標所載のものは本文九十六句で、終りに四言八句の偈がついて居り、浄業和讃所載のものは本文六十句で、終りに五言四句の偈がある。此の様な差異は如何して起つたのであらうか。高野氏も坂井氏もこれを説明しては居られない。左に其の差違を対照して見よう。

第一に天台霞標所載の和讃の冒頭の左の十六句が、浄業和讃所載のものには無い。即ち

攝取不捨乃光明波  
念須留處乎照須奈利

觀音勢至乃來迎波  
聲乎尋且迎不奈利

娑婆界乎婆可厭  
厭波婆苦海乎度奈牟

安養界乎可欣  
願波婆淨土仁可生

草乃庵乃靜仁豆

八功德池仁心澄

夕乃嵐無レ音豆

七重行樹仁度奈利

臨命終乃時至利

正念不レ違豆向レ西

傾レ頭計合レ手世

彌興淨土乎欣求世牟

の十六句が淨業和讃の方にはないのである。而して第十七句目の「聞ば西方界の空」が淨業和讃の方の第一句になつてゐる。

次に天台霞標所載の和讃の第六十九句から第八十八句までは左の如くである。

即知金蓮台仁乘

佛乃後仁隨比豆

須叟乃間乎經程仁

安養淨土仁往生寸

○昔波大悲乃利益乎

○纔仁傳聞之加土

○今波彌陀乃引接乎

○心末末仁蒙(コ、ロ、マ、ニ)禮利

然仁彌陀乃淨土波

快樂不退乃處仁豆

壽命毛無量仁長計禮婆

樂盡留事會無岐

三十二相具利豆

莊嚴端正殊妙奈利

六通三明悟得豆

心乃如久自在奈利

源信僧都の作と傳へられる和讃の眞偽

上波有頂乃雲乃上

下波無間乃底未泥毛

苦海乃群類悉久

利益普久施世利

とあるが、淨業和讃所載のもので、右の部に當る所は

○昔ハ大悲ノ利益ヲ

○ワツカニ傳ヘキ、シカト

○今ハ彌陀ノ引接ヲ

○コ、ロノママニカウフレリ

△ワカ身ハ業障オモクシテ

△戒光キエテヤミフカシ

△佛日ハルカニテラサスハ

△イヨイヨ長夜ニマヨハマシ

とある。即ち「即ち金蓮台云々」の四句、及び「然に彌陀の云々」の十二句が淨業和讃の方にはなく、而して淨業和讃の「ワカ身ハ業障云々」の四句は天台霞標の方には無いのである。次に最後の部分は左の如くである。

○(天台霞標所載の和讃)

(淨業和讃所載の和讃)

○來迎引接垂給閉

○來迎引接タレタマヘ

願久波此乃功德乎

願以此功德

普久衆生仁施之豆

平等施一切

同久心之發之都都

同發菩提心

安養國仁往生世卒

往生安樂國

上來功德

回施法界

自他平等

滅罪生善

臨命終時

面見彼佛

共生極樂

速證菩提

この二種の和讃のみについて考へると、何方かが原形で、他はそれを若干省略したか或は添加して出来たものど考へなければ成らない。然るに淨業和讃の撰者は、凡例の中に「來迎讚(來迎和讃のこと)ノ如キ、古へ願生ノ行者、専ラ稱讚シケルニヤ、往々諸傳ニ見ユ、然ルニ類本一二ニアラズ、讚文モ剩脱一準ナラズ、見流ノ一本ヲ見ルニ今ノ我身ハノ一句ヲ脱シ、首尾ニ數句ヲ剩セリ、其句、光明別願、極樂、迎接、釋迦等ノ讚ニマタ是ヲ列ヌ、今ノ文ヲ彼ニ引用セルカ、後人彼ヲコレニ贅セルカ、正不決シガタケレバ、シバラク門下ニ傳ル一本ニ依ノミ」と云つてゐる。自分は前に天台霞標所載のものど淨業和讃所載のものとの異同を比較したが、なほ此の外にも數種の異本がある譯である。(自分は未だ見た事が無いけれども)。而して先になげた二種も異本の一つであると見ねば成らない。其處でこの和讃と光明、別願、迎接、釋迦、極樂等の諸和讃との間に語句の類似してゐるものを擧げて見よう。(因にこれらの和讃は淨業和讃所載のものに依る)

天台霞標所載の來迎和讃を基準にして記すと、冒頭の四句（前記、攝取不捨の光明は、以下）は其のまゝ、「光明讃」の中程にある。同第六十九句から以下四句（前記、臺に乗り、以下）は、一遍上人の作と云ふ「別願讃」の終りの方にある。同じく第七十七句から以下四句（前記、然るに彌陀の淨土は、以下）は「極樂讃（本）」の中程にある。同じく第八十五句以下四句（前記、上は有頂の雲の上、以下）は「釋迦讃」の最後にある。——但し最後の句が釋迦讃には「利益アマテクオヨホサム」とある。——「迎接讃」は其題號からも推せる如く、内容は來迎和讃と同じものであり、同一の句は八句ばかりあり、類似の句は甚だ多い。其處で迎接讃を除いて見ると、「光明」「別願」「釋迦」「極樂」等の和讃と同一の句を含んでゐるのは、天台霞標所載の來迎和讃である。——して見ると淨業和讃所載のものが原形的なもので、之に他の和讃の名句が混入したものが天台霞標所載の和讃であると云つて見たい様でもあるが、然し實際二つの和讃を對照して見ると、容易に推斷を下し得ない。殊に淨業和讃所載のものは、「聞けば西方界の空」といふ句で初まつてゐるが、これでは餘りに唐突な感がする。従つて如上の事から、淨業和讃所載のものが原形的なものとは云ひ得ない。加之、光明讃、極樂讃、釋迦讃、迎接讃等は、いづれも作者も製作年代も明かでないものである。（別願讃は果して一遍上人の作か否か自分は未だ調べてゐない）。來迎和讃が源信の作である事を論定するには、先づこれらの和讃との關係を論定しなければ成らない。又來迎和讃を論ずるには、先づその異本を求め、それについて、最も原形に近いものを推究しなければ成らない。然



るに高野博士や坂井氏の研究にはこの點には少しも觸れて居られない。従つて兩氏の研究の結果は直ちに信賴し難いものであると云つて差支へないであらう。が余輩も亦遺憾ながら此以上筆を進める準備が無い。この和讃については他日を期することにする。

## 七、山王和讃

この和讃について高野博士は、日本歌謠史の中に、僧都の作と傳へる「自行讃」と云ふものが、この山王和讃であるらしい云ひ、この和讃の中心は「綠ノ空ニ月澄メバ、中道諦觀圓ナリ、大虛ニ霞タナヒケバ、眞如ノ觀慧靜ナリ」等の十餘句にあるとし、其が自行讃の名に合しさうに思ふ。と云つて居られる。——余輩は博士の説に賛成し難い。其は後に記す——而して其他には此和讃について一言も費して居られない。博士以外の人で此和讃について論せられた人は無い様である。さて此和讃を見ると、冒頭に

法宿華台聖眞子

三聖一乃山仁樓

三身卽知一身乃

佛也止曾示之計留

東西楞嚴三乃山

僧徒波三千常仁住

心佛衆生三乃法

界如三千具閉多利

とある。「三寶輔行記」に「大宮權現名ニ法宿菩薩事」といふ條目があるから、法宿は大宮權現を

指すものと思ふ。華台と云ふことは寡聞の自分には分らないが、山王和讃と云ふ名稱、及び和讃の内容から推すと、二宮、即ち小比叡を指して居るに相違ないと考へる。本地垂迹思想から云ふと、大宮は釋迦、二宮は藥師、聖眞子は彌陀（垂迹は八幡）と云ふ事になつてゐる。大宮權現が何故法宿菩薩と呼ばれるのか、法宿菩薩と釋迦とは如何なる關係になるのかと云ふ事については自分は未だ考へて居らない。が法宿が事實上大宮即ち大比叡を指して居る事に誤りはないと思ふから、そのつもりで以下筆を進める事にする。華台が二宮を指すとするのは、全く自分の憶測である。この點博雅の士の高教を待つ次第である。

さて法宿が大比叡、華台が小比叡を指すものとして考へて見ると、此處に問題になることがある。即ち、山王を禮讚するのならば大宮、二宮、即ち大小比叡を禮讚すればいゝ筈であるのに、何故末社の聖眞子を加へ、之を大小比叡と同格に取扱つたのであらうか。又末社を加へるのならば、八王子、客人、十禪師、三宮等を何故加へなかつたのであらうかと云ふ事である。（この和讃中には、八王子以下の末社の事は一言半句も費して居ない）。神の位は貞觀元年に大宮は正二位、二宮は從五位。（末社は無位歟）。元慶四年に大宮正一位、二宮從四位。承安二年に二宮從一位。聖眞子等の末社は從二位。建長二年に七社悉く正一位になつてゐる。此に依つても大宮二宮が聖眞子以下の末社とは區別されて居り、聖眞子は決して大宮二宮と同格では無い事が分る。僧都の時代には聖眞子は

位があつたか否か自分は未だ調べて居ないが、少くとも大宮や二宮と比肩し得べきものでなかつた事は明かであらう。

勿論、朝廷から賜はる神の位と、個人の信仰とは直接關係は無い様ではあるが、時代の背景を見る爲には相當重要視して、であらう。僧都より約百五十年前、智證大師の傳を見ると

仁和二年秋、皇帝不豫危篤甚劇、薰修走幣、遂無得驗、大政大臣越前公、令人屈和尚、侍帝病、奉命下山、侍仁壽殿、一宿之中、病即平癒、和適如常、天皇深以感服、勅云、朕深欲酬公恩、有何希望焉、和尚答云、貧道菩提之外、亦無所求、但叡山地主明神、以弘道之寄、深記於貧道昔者踰滄溟而求法、亦是山神之志也、伏望加年分度者二人、以報山神之恩、天皇嘉納、即納年分度者

二人一人大日業  
一人一字業

とある。この時の上表文は三代實錄に載つて居て、「勅加試延曆寺年分度僧二人、其一人大毘盧遮那經業、爲大比叡神分、其一人一字佛頂輪王經業、爲小比叡神分」と云ふ語があり、又「當寺法主大比叡小比叡兩所明神云々」と云ふ語もある。

又、時代を下げて見ると、鎌倉時代の初に出來た顯昭の袖中鈔（卷九）を見ると

「日吉明神と申すは、三輪明神を、傳教大師の天台宗守護神のために、勸請し奉り給へると申は、大宮權現也、大ひ、ひと申す。二宮は地主也。をひ、ひと申す。大宮は本地は釋迦、垂迹は法形也。

二宮本地は薬師也。垂迹同也。

とある。又源平盛衰記卷四「山王垂迹の事」の條を見ると、山王權現(大比叡)は釋尊の垂迹であり、地主權現(小比叡)は垂迹して國常立尊となられたと云ひ、

されば我朝は、大比叡小比叡とて、大宮二宮の御國なり。迹を叡山の麓に垂れて、威を一朝の間に振ひ、圓宗守護の靈神、王城鎮護の靈社なり。(日本文學大系本による)

とあつて、大小比叡だけを特別扱にして居る。但しこの章には數回の神輿動座の事を記してゐて、その中に「崇徳院の御宇、保安四年七月十八日、忠盛朝臣、神人殺害の事に依つて、三聖並に三宮の神輿を下し奉る」と云ふ句があるが三聖と云ふ語は突然に出て來てゐるので何の神を指すのか明確でない。(平家物語には「神輿入洛」とあるのみで三聖の語はない)。

以上は大小比叡を他の末社と區別した方の例であるが、然し末社は如何に考へられて居たであらうか。梁塵秘抄を見ると、卷二、四句神歌の中に

かみのいゑのこきうたちは、やわたのわかみや、くまの若王子こもりおまへ、ひねには山王十禪師。かもにはかたをかきふねの大明神。

ひがしの山王おそろしや、二宮まらうどの行事のたかみこ、十禪師やまをさ、ゆつるきの三宮、みねには八王子ぞおそろしき。

王城ひむがしはちかたうみ、天台山王みねのおまへ、五所のおまへは正しんし、衆生ねがひをい  
ちどうに

等がある。又寶物集を見ると

我朝ノ四天王寺ニハ、佛法ノ始救世ノ姿ヲ顯シ給、南海ノ邊ニハ、熊野ノ權現、西ノ御前ニハ千  
手顯現ナリ、北嶺ノ麓ニハ日吉山王八王子ハ垂迹ニアラスヤ。

とある。これらに依つて見ると、少くとも平安朝に於いては、大宮二宮の二神。或は大宮以下の七  
社について云々して居るが、大宮、二宮、聖眞子の三つだけを特別扱にする例は見當らないのであ  
る。更に梁摩祕抄卷二、四句神歌の雑の中に次の如き歌がある。

おほみや靈鷲山　　ひむがしのふもとは菩提樹下とか

兩所三　　は釋迦藥師　　さては王子は觀世音

この兩所は釋迦と藥師、即ち大宮と二宮の意である。而して三所とは大宮二宮に王子を加へたもの  
と考へられる。王子は山王七社の中の八王子のことであらう。山家最略記の山王密記に「千手八王  
子」とあつて、八王子の本地が千手觀音とせられた事が知られる。斯くして見ると、大宮、二宮、  
聖眞子だけを特別扱にするこの山王和讃の思想は頗る奇妙なものである。

又源信僧都の師慈惠大師の作と傳へられるものに「日吉神社七社祭禮船謠」といふものがある。山

王權現、二宮、聖眞子、八王子、客人、十禪師、三宮の七社について、各船謠五首、早謠五首、合計七十首の謠であるが、これについて佐々木信綱博士は句法、文字(全部一音一字の眞字で書いてある。)假名遣、内容から見て、所傳の如くこれは慈惠大師の作であらう、大師の作で無いとしても、慈惠大師時代のものに相違ないと云はれた(和歌史の研究)然るに高野博士は、文字の使用法、謠の調子内容等から見て、底到慈惠大師の作とは思はれない。大師よりも、もつと後の時代のものであらうと云つて居られる(日本歌論史)自分は今この兩説の當否を論じようとは思はないが、佐々木博士の説に従つて見ると、師の慈惠大師が此の様な考を持つて居たのに、何故源信僧都は、大宮二宮聖眞子だけを禮讚したのであらう。又高野博士の説に従つて見ると、慈惠大師よりもつと後の時代に於いてもこの船謠の如き考があるのに、僧都は何故聖眞子を他の末社とは異つた取扱をしたのであらう。かくして考へると、大宮二宮、聖眞子の三神だけを禮讚してゐる點から見て、この和讚を僧都の作とする事は甚だ疑しく思はれる。

さて此の和讚に於いて、何故二神とも云はず七社とも云はずに、大宮二宮聖眞子の三つだけを取出したのであらうか。和讚を一讀すると直ちに氣付く事は、「法宿華臺聖眞子三聖一の山に樓、三身即ち一身の佛也とぞ示しける」とある如く三及び一と云ふ數字で結び合せられてゐる。其處で思ひ出すのは、かの山王一實神道の思想である。この思想の表はれてゐるもので製作年代の明な元亨釋

書の卷十一、釋行圓の條を見ると

(山王曰く)我名山王。公委<sub>レ</sub>之乎。表<sub>三</sub>三諦即一<sub>一</sub>也。山字堅三畫者空假中也。横一畫是即一也。王字横三畫者三諦也。堅一畫又一也。二字三畫而有<sub>二</sub>貫之象<sub>一</sub>。故我立爲<sub>レ</sub>號也。一心三觀一念三千。亦復如是。是以我護<sub>二</sub>持臺教<sub>一</sub>。鎮<sub>二</sub>覆國家<sub>一</sub>。我身外無<sub>レ</sub>名。名外無<sub>レ</sub>身。即<sub>レ</sub>身而名。即<sub>レ</sub>名而身。名外無法。法外無<sub>レ</sub>名。即<sub>レ</sub>名而法。即法而名。身與<sub>二</sub>名法<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>二無<sub>レ</sub>三。是名一乘。我名義也。とある。三即一、一即三と云ふ考へ方がよく現はれてゐる。又日吉神社神道祕密記、耀天記、嚴神抄、山家要略記等を見ると、大宮の本地は釋迦、二宮の本地は藥師、聖眞子は八幡大菩薩で、本地は彌陀であると云ひ、釋迦藥師彌陀は其本源は同一體であると説いてゐる。二十二社註式の日吉社の條を見ると

大宮、三輪同體、號大日枝。二宮、國常立、號小比叡。聖眞子、八幡。己上謂之<sub>三</sub>三聖<sub>一</sub>。

とある。我々は此處に於いて初めて「法宿華臺聖眞子、三聖一の山に棲む」と云ふ句を説明し得るのである。即ち和讃の句は山王一實神道の思想であり、それは山王一實神道の思想の萌芽と云ふ可きものではなく、完全な山王一實神道の思想である。従つてこの和讃は山王一實神道の成立以後に出來たものと云はなければ成らないと思ふ。

以上は冒頭の八句を中心にして論じたものであるが、これについて

綠乃空仁月澄婆

中道諦觀圖奈利

大虛仁霞變鬚婆

眞如乃觀慧靜奈利

冬寒氷乎結土母

温和乃春波水止那留

無明法性異那禮止

悟禮婆其體一奈利

谷與利流留春水

峰與利下寸秋風

一切衆生悉久

佛性有土會唱計流

と云ふ句がある。前記の如く高野博士はこの十二句を擧げて、これが此和讃の主想で、内容から推して此和讃は「自行讃」の名に合しさうに思ふと云つて居られる。なるほど此の十二句だけを見れば、或は「自行讃」と云ふ名にした方がいゝように考へられるかも知れない。然し句はこれで終つて居るのではなく、「叢茂る草木も、毘盧の身土に不<sub>レ</sub>異、嶮く疊る岩石も、常寂光土に無<sub>レ</sub>隔云々」と云ふ語に續いて居るのであつて、此等の句は凡て山王禮讃の爲に用ゐられてゐるのである。其故自分はこの和讃の内容が自行讃の名に合しさうに」は決して思はない。

此和讃をなほ讀んで行くど、

黃金白銀淨土仁毛

釋迦乃分身御座土

諦衆生乎法止之豆

不<sub>レ</sub>説ニ法華一國奈禮婆



三世乃諸佛乃淨土仁毛

一乘教迹弘禮留

此山勝禮且覺閉多利

阿闍佛土波歡喜國

淨土乃莊嚴妙奈禮土

男女止俱奈留國奈禮婆

此乃山彼乃土仁勝多利(以下略)

等とあつて、實に極端な叡山禮讚であり、山王禮讚である。翻つて思ふと、源信僧都は熱心な淨土教信者であつた。かの僧都に此の様な叡山禮讚、山王禮讚の和讚が出来るとは到底考へられない。此處に於いて余輩は、此和讚は到底僧都の作ではなく、その製作年代は山王一實神道の成立以後、即ち鎌倉末期以後に出来たものと考へたいのである。

然るに最後に一つ問題がある。それはこの和讚の終りの四句が

頂命頂禮大權現

今日與利不捨我等豆

生々生々仁擁護之豆

阿耨菩提止成給閉

とあるが、梁塵秘抄の四句神歌の雜の部に

歸命頂禮大權現

けふよりわれらをすてずして

生々世々におうごくて

あのか菩提なし給へ

とあつて全く一致する。(第四句の「阿耨菩提」との「と」が梁塵秘抄にはない。)

源信僧都の作と傳へられる和讚の眞偽

自分が前に極樂六時讚や天台大師和讃と梁塵秘抄との間に認めた如き關係を、山王和讃にも認めるとするならば、山王和讃は平安朝に出來たものと云はなければ成らない。然しさう云ふ爲には、聖眞子が特に、平安朝に於いて他の末社とは違つて、大宮二宮と相並んで崇敬せられた事をも證明しなければ成らない。然もさういふ事實は余輩の管見には入らなかつた。抑或る和讃の語句が梁塵秘抄と一致したからと云つて、その和讃の悉くが梁塵秘抄よりも前に出來たとは云ひ得ない。梁塵秘抄の歌が、其後に出來た和讃に影響を與へた事も十分あり得る筈である。かくして考へると、先に記した自分の見解に誤が無いとするならば、この最後の四句は、山王和讃を製作する時に、他から——梁塵秘抄からか、或はこの四句の載つて居た他の書からか、或は口傳へに傳つて居たものからか——借用したものと考へなければ成らない。従つてこの四句は山王和讃の製作年代を推定する上には何等役に立たぬものと考へるのである。

### 八、傳教大師和讃

此和讃が源信僧都の作であるとは、權威のある書物に記されて居ない様であるが、井上松翠氏編の「佛教和讃集」、藤井佐兵衛書林編纂發行の「佛教和讃五百題」の如き坊間の書に、慧心僧都作として出てゐるので、此處に一考し様と思ふ。

全編二百八十三句の長編であるが、先づ冒頭の數句を擧げて見ると、

歸命頂禮日東國

傳教大師と申しは

智者の後身と聞くからに

四依の居士と覺たり

其祖を委しく尋ぬるに

大漢四百の末のころ

卯金刀の姓氏なる

登萬王とぞ申しける

本邦王化の盛んなる

應神帝の御代とかや

數多の男女を携へて

徳化を慕て至りけり(以下略)

と云つた調子で、その調子から見ても、平安朝とか鎌倉とか云ふ古い時代の作で無い事は一見して分る。又文中に天台大師和讃の手法を真似た跡の歴々たる處がある。従つてこれが僧都の作でない事は、ことごとくしく證明するまでもない事である。自分の今の問題に於いては、此の和讃について、此以上云ふ必要は無いと思ふ。

昨年暮に刊行された裕慈弘氏編纂の「天台宗聖典」には、此の和讃が收めてあるが、作者の名は記してない。而して同書附録の略解題に、この和讃について「(上略)文化九年、豪恕大僧正の記する所によれば、當時最深法印の作なることを知ると雖も、未だ依て作者法印の爲人を詳にせず」と記して居られる。

この和讃が源信僧都の作と誤り傳へられたのは、僧都に「天台大師和讃」の作がある處から、天

台大師を傳教大師と思ひ違へた爲であらうかと思ふ。

### 九、其 他

右に擧げた外に、長西の淨土依憑經論章疏目錄に自行讚一卷といふのがある。題號から見ると和讚の様にも思へるが、見た事がない。同書に花鳥集と云ふものが僧都の作として出てゐる。これも或は和讚の類かとも思ふが、見た事がない。又自行讚と並べて六八弘願一卷とあるが、これは和讚であるか否かも明でない。又本朝法華經記の僧都の條に八塔倭讚を作つたとあるが、これ又見た事が無い。

### 十、結 語

以上記した所に依つて、源信僧都の作と傳へられる和讚は十餘篇あるが、内「極樂六時讚」と「天台大師和讚」の二つは僧都の作として認めて差支へないと思ふ。「二十五菩薩和讚」「十樂和讚」「山王和讚」「傳教大師和讚」の四つは到底僧都の作とは云ひ得ないものと思ふ。「來迎和讚」は自分としては眞作とも偽作とも云ひ得ないが、天台霞標所載のものも淨業和讚所載のものも、共に天台大師和讚や極樂六時讚に比べると調子は大分違ふ様に思ふ。「自行讚」「八塔倭讚」等は前記の通り、未だその一行をも見た事が無いのであるから何とも云ひ得ない。

最後に斷つて置かねば成らない事がある。其は本稿に用ゐた材料は、文政八年の序のある三冊本

の淨業和讃、大正三年刊行の大日本佛教全書所收の天台霞標、昭和二年刊行の惠心僧都全集等々甚だ新しいものばかりである事である。従つて本稿に於いて僧都の作と推定した「極樂六時讃」や「天台大師和讃」の如きも、その一字一句悉く僧都の作と推定したのでは決して無い。又僧都の作では無いと推斷した和讃も、余輩の目に觸れたものは、後世の甚だしい改竄が加へられたものであつて、同じ題名で全く異つた内容の古寫本等が將來見出されるかも知れない。此點は自分として甚だ物足らぬのはあるが、現在の自分としては此以上仕方が無いのである。本稿に於いて、和讃の用字法、假名遣等には全然觸れずに、間接的な記述ばかり爲したのは、右の理由に依つてである。(完)

附記。本稿を草するに當り、橋川教授から懇篤な指導を受けた。又資料を貸與せられた。此處に記して感謝の意を表す。

補遺一。「極樂六時讃」について記した中に、六時の順序を、説明を用ゐずに、晨朝、日中、日没初夜、中夜、後夜と云つてしまつたが、淨業和讃の凡例に「此讃(極樂六時讃)ノ次第一準ナラス、今ハ古本ニ從テ晨朝ヲ始メトス」とある。即ち徳川末期には、この和讃の六時の順序が色々になつて居た事が知られる。然し和讃の内容から見て、晨朝、日中、日没とあるのが、この和讃の

本來の形であると思ふ。

補遺二。前號、三五七頁十行目、「當來勝利」とあるのは「念彌陀別益」の誤り。

補遺三。本年六月、近藤信夫氏が拙稿（前半）を見られたと云つて手紙を寄せられ、併せて雜誌「東方佛教」の第二卷第十二號を惠與せられた。同誌には、御橋惠言氏の論文「平重盛の燈籠堂と淨教寺」と云ふ論文が載つてゐるのであつた。自分は前に二十五菩薩和讃について記した中に平家物語の「燈籠并大地震」の條を引用して、この中にある「時衆」と云ふ語は「臨命終時の來迎の聖衆の事」と簡單に云ひ切つて居たのであつた。所が御橋氏の論文には「時衆」は時宗の名目で、『觀經疏玄義分』に「道俗時衆等、各發無上心」とあつて、唐の善導大師は其門弟道俗を指して時衆といはれたが、我朝一遍上人は、六時念佛の衆を呼ぶに此稱を用ゐる」と云はれ、播洲問答領解抄二の「觀經疏云、道俗時衆等、○中略道俗者、出家五衆名道、在家二衆名俗、皆是大師門弟也、因茲今復一遍上人、順大師而自呼我門徒之道俗而云時衆也」と云ふ語を引用して、「時衆」は「六時念佛」の衆と云つて居られるのであつた。

然し「時宗」の「時」の解釋は四種ある。(一)臨命終時の時、(二)時機相應の時、(三)值遇知識の時、(四)六時禮讚の時。これである。時宗要義集卷上の「時宗名義問答時宗得名之章」に「問。何故名時宗耶。答。時者臨命終時之義也。佛教之大綱。以出離生死爲最要。到涅槃無爲

果<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>至極<sub>一</sub>矣。凡出<sub>ニ</sub>離生死<sub>一</sub>到<sub>レ</sub>臨終一念之時<sub>一</sub>。故此宗之意。厭穢欣淨爲<sub>ニ</sub>本意<sub>一</sub>。恆願一切臨命時存。是時之義也。(中略)故略云<sub>ニ</sub>時宗<sub>一</sub>。委可<sub>レ</sub>謂<sub>ニ</sub>臨命終時宗<sub>一</sub>也矣。問。依<sub>ニ</sub>眞宗要法記<sub>一</sub>。先師舉<sub>ニ</sub>三義<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>宗名證<sub>一</sub>。一宗家玄義分造流之偈云。道俗時衆等文。二大經下曰。我以慈悲哀愍持留此經止住白歲文。三小經執持名號若一日乃至一心不亂其人臨命終時文。以<sub>レ</sub>之今宗爲<sub>ニ</sub>得名<sub>一</sub>。爾者以<sub>ニ</sub>三義<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>宗名<sub>一</sub>。何以<sub>ニ</sub>第三義<sub>一</sub>。局今爲<sub>ニ</sub>宗名<sub>一</sub>如何。答。先師舉<sub>ニ</sub>三義<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>宗名<sub>一</sub>時。分<sub>ニ</sub>別傍正<sub>一</sub>。而以<sub>ニ</sub>第三義<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>正義<sub>一</sub>。故今爲<sub>レ</sub>名。問第三義爲<sub>ニ</sub>正義<sub>一</sub>意旨如何。答。第三義。今宗名。文義契當故爲<sub>ニ</sub>宗名<sub>一</sub>。問。初以<sub>ニ</sub>二義<sub>一</sub>何爲<sub>ニ</sub>傍義<sub>一</sub>乎。答。各各淨土經釋故。雖<sub>ニ</sub>並不相違<sub>一</sub>。前二文義有<sub>レ</sub>便。文今違<sub>ニ</sub>宗名<sub>一</sub>故。舉爲<sub>ニ</sub>傍義<sub>一</sub>。是當流之相承也。」とある。即ち時宗に於いては、三經の中、阿彌陀經を最も重んずるのであるから、「時」は臨命終時の意に解するのが、最も有力である。處で平家物語の燈籠の條には、時衆を特に「六時念佛の衆」と解しなければ成らない理由は無い様に思ふ。而して先にも記した如く「當家他家の人々の御方より、眉目よく若う盛なる女房達を請し聚め」たのは、來迎の聖衆に擬する爲であると思ふ。西譽の當麻曼陀羅疏等には聖衆來迎の相を眞似る法會があつたが記されてある。當麻曼陀羅疏は後花園天皇の永享八年の作であるから、遅くとも室町の初期にはこの法會があつた事が知られる。又平家物語の燈籠の條には「毎月十四日、十五日を點じて」とあるが、これは

源信僧都の作と云ふ横川首楞嚴院二十五三昧起請等に依つたものではないかと思ふ。この起請には冒頭に「右念佛三昧。爲<sub>ニ</sub>往生極樂<sub>一</sub>。始<sub>レ</sub>自<sub>ニ</sub>今日<sub>一</sub>。各至<sub>ニ</sub>千<sub>レ</sub>命期<sub>一</sub>。以<sub>ニ</sub>毎月十五日<sub>一</sub>。一夜不斷共修<sub>ニ</sub>念佛<sub>一</sub>。云々」と記してある。兎も角自分は平家物語の「時衆」は臨命終時の聖衆と解して差支へないと思つてゐる。